
鳥来々～熱烈漢浪漫記～

オオイワ・ソウダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥来々々熱烈漢浪漫記

【Nコード】

N5450P

【作者名】

オオイワ・ソウダイ

【あらすじ】

ファービィとファービィを闘わせ競わせる修羅の時代。

世界最強を夢見る少年は何を見るのか。夢につき従うファービィは何を思うのか。

次々に戦地に屍を晒す戦友達。

新世代スペクタクルバトル小説。

【序章】

諸君はファアービィを改造する遊びを知っているだろうか。

ファアービィの身体を新たなパーツを組み込む事により絶大なパワーアップを図り、友達のファアービィと戦わせるのだ。

現在小中学生の間で大変流行している遊びである。

「見ろよ！俺のファアービィ、青毛だぜ！」

少年が得意気に見せるのは青いファアービィ。

手並みにもレアリティがあり、少年達の収集欲（コレクター心）をくすぐる。

「へへーん。俺なんか赤だぜ、赤。情熱の赤！」

負けじと相手の少年も自前のファアービィを自慢する。

少年達に間で大切なのは資産価値ではない、如何にファアービィに愛着を持ち、自慢できるかなのである。

青いファアービィと赤いファアービィが並んだ。

今からバトルが始まるのだ。

少年は丹念に背中ネジを巻く。

「1、2、3でスタートだからな！抜け駆けは無しだぞ！」

「分かってるよ！じゃあ行くぞ！」

少年は同時に手を離した。

すぐさま、赤いファアービィは青いファアービィの耳先に噛み付く。

「フィギイイイイイ！」

「行け！殺れ！殺せ！」

少年の煽る声に呼応するように、ファービィの目は血走り、相手を激しく攻撃する。

手段は多彩である。嘴で突つく、身体を噛みちぎる。意図的にネジを破壊しようとする素振りも見せる。

ファービィと言っても猛禽類である。

その鋭い嘴は相手の肉を削ぎ、内臓を抉りだす。

次第に優劣がハッキリしてきた。

青いファービィが目に見えてズタボロに引き裂かれている。

「ピギイイイイイ」

「ああーっ！俺のファービィ！」

かん高い叫び声をあげる青ファービィ。

だがこの程度の苦痛は序の口である。

両方命が懸かった勝負、決して手を抜いたり容赦したりはしない。

そのうち素早い攻撃の集中は眼に集められた。

「ブゴッ！！ブゴオオオオ！！」

死を目前にした生命の悲鳴は例外なく、豚の叫びに似ている。

理性をなくし獣の如く雄叫ぶファービィに、少年達は身震いした。

「ゲエエエエエ！！」

激しい嘔吐。

崩れる様に倒れ、青いファービィは痙攣する。

恐らく脳に致命的なダメージを与えられたのだろう。

そのままビクンビクンと跳ね、現場はじわりじわりと血の海になった。

そして青いファービィはゆっくりと目を閉じた。

「……」

「俺のファービィの方が強かったらしいな」

「……」

「ちくしょーっ!!」

少年は駆け出した。

愛するファービィを失った悲しみ、そして勝負に負けた悔しさ。複雑な思いが少年の心を蝕み、自宅に引きずり込まれるように、帰っていった。

青いファービィの死骸は、赤いファービィが美味しく頂いた。 「……」

自宅に帰った少年は泣いた。

ベツトの上で膝を抱え、泣いた。

あれほど愛着を持ったファービィだったのに。初めて自分の金で買ったファービィだったのに。あそこまで……完膚なく叩き潰されるなんて。

「……」

少年の苦痛はいうまでもない。

新しいファービィを買うにも、既に少年に財産はなかった。

「やっと……やっと始まる所だったのに」

少年はベツトシーツを握り締める。

彼のファービィ生命は断たれたに等しかった。

だがその時。

扉の向こうで気配がする。

気配というより殺気だ。

血生臭い猛者の匂いだ。

「この野郎……」

扉が開くと眼帯を着けた男性がいた。

腹巻きを身体につけ、煤けて黒い肌は不潔感より、力強さを感じさせる。

「負けて帰ってきたのか」

「……」

「ファービィはどうした。死んだのか」

「……」

少年は無言で頷く。

男性は少年の横に腰掛けた。

「俺は負けた事を責めるつもりはねえ。誰だって敗北を経験するこ
とはある」

「だが……俺が許せねえのはな」

バキッ！

歯も折れんばかりの勢いで、男性は少年の顔を殴った。

少年は口から血を吹き出す。

「俺が許せねえのは、いつまでもメソメソ泣いてる事と、死んだファ
ービィを放っぱり出して、逃げ帰ってきた事だ！」

男性は凄まじい剣幕で怒鳴った。

少年は感に打たれたか、不意を打たれたか、呆然と男性の顔を眺める。

「自分の為に戦って死んだファービィに恥ずかしくねえのか！それがたった数時間の付き合いだとしてもだ！」

「そ……それは……」

少年は口を嚙み締める。

男性は懷から何か取り出した。

それはファービィだった。

「俺の自前のファービィだ。黒毛に赤い鶏冠……俺はストライプって呼んでる」

ストライプは鋭い眼差しで少年を睨む。

「こいつを貸してやる。青いファービィの死骸を取り返してこい。そして、殺った奴を殺してこい」

「おやっさん……」

「こんなのは今回一度きりだ。次はねえぞ」

「おやっさん……すまねえ、おやっさん」

「次からは二度とてめえの尻拭いはしねえ、覚悟しろ」
「……」

少年は涙ぐみながらストライプを受け取った。
そして眉を改め、再びあのベンチへと飛んで行く。

ストライプの戦いは凄まじい物だった。

赤いファールビィを完全に圧倒し、あっという間に屠ふったた。

対峙した瞬間に決着はついていたのである。始めから赤いファールビィは戦意喪失していた。

「あ……ああ……」

「悪いな、坊主」

相手の少年は涙を零す事すら忘れ、狼狽える。

ストライプは相手の小腸を掻き分け、青いファールビィの物と思われる、青毛を見つけた。だした。

そっと少年に渡す。

「……」

（俺が未熟だったばかりに……お前を死なせてしまった……）

少年はギュッと胸に押しあてた。

そしてそのまま口に運び、飲み込んだ。

「ありがとうストライプ……お前のお蔭で仇が討てた」

ストライプは（例なら親父に言え）と言わんばかりにそっぽを向く。親父の命令でなければ、お前の様な軟弱漢には従わない、と。

「……」

少年は無言で家に帰った。

それから数日後である。

親父が家を出ていく事になった。

「また武者授業の旅ですか？」

「ああ、こんな雑魚ばかりの街じゃ、腕が錆付く。北に向かうぜ、俺らあ」

「……お世話になりました」

「口先の挨拶はいらねえ。感謝なら言葉で示せ」

男性は少年の胸をトン、と叩く。

「お前は早く相棒を探せ。そして、俺と肩を並べるほど強くなってこい。礼はそれからだ」

「……」

「お前は俺の实の息子じゃねえ。だが、俺は自分の息子以上に、お前に期待してる」

「……はい」

「勝ち上がってこい。邪魔する奴は殺してこい。いつか見違えて逞しくなったお前に会えるのを、待ってる」

「……」

少年は涙で前が見えなかった。

親父は何か呟いて、颯爽と旅に出ていったが、少年は暫く立ち止まり、泣き続けていた。

いつか親父を越えてみせる。

少年が一生誓った、運命のあの日の思い出である。

【第一話】絞首台のミイラ 前編

親父が旅立ってから数週間が経った。

未だに少年はファービィを手にしていない。それどころか外出してすらいなかった。

RPGに夢中なのである。

「……」

黙々とレベルを上げる姿は廃人に近い。少年は無思考のまま、淡々と作業を続けた。

その姿は以前の情熱に燃える少年とかけ離れたものである。まさに死人だった。

ガタン！

窓ガラスが揺れた。

少年は物音に気付き振り返る。するとそこには、ガラスにビッチリ貼りついたファービィがいた。

「……」

（懐かしいな。ファービィか）

少年は物思いに耽るかの様子でファービィを見つめる。

ファービィはするすると窓を開け、中に入ってきた。

口に手紙を加えていた。

女性の筆体である。

「是非とも会いたい。以前から姿を見ていない。連絡をくれ……」

「……母さんだろうか」

氏名に目をやると「シスター」と書いている。

少年は全く覚えがない。

「お前の名前はマスタードか……」

伝書鳩役を務めたファービィは、その黄色い体型からか、マスタードと名付けられている。

マスタードは急かす様にして少年の裾を引っ張った。

「嫌だよ……俺は行かない」

「俺はもう二度と誰にも会いたくないんだ。一生この部屋で親のスネかじって生きる」

親父との約束はどうしたんだよ！と言わんばかりにマスタードは跳ねる。

「親父か。アイツも見ろ目がない馬鹿だったな……」

「ちよっと待て。なんでお前親父を知ってる？」

マスタードは「理由が知りたければついて来い！」と言いたげにギリギリ睨む。

少年もその威圧感に押されて遂に外出する事に決めた。

中学時代に着ていた白いパーカーをピチピチに着こなし、ズボンはシャカシャカの黒。

非常にダサいがマスタードは何も言わなかった。

やがて一件の屋敷にたどり着く。

結構な豪邸である。

少年は今さらながら「呼び出した女は誰なんだ？」と訝しがる。そして玄関に足を踏み入れると、少年は驚愕の人物を目の当たりにした。

「親父じゃないか！！親父が女装している！！」

「私はおやっさんの双子の姉。便宜上シスターと呼ばれているわ」
「シスター……」

シスターは黙々と少年に近づく。
そして思いっきり頬をひっぱたいた。

「数週間も経つのにな何やってんのよ」

「いやシスター。俺はもういいんだ。もう夢は諦めたんだ」

「諦めたって……まだ何もやってないじゃない！？」

「もうファービイを買いに行くのすら面倒臭いんだ。向いてないんだ、俺には……」

シスターは（コイツのどこに見所があるんだ）と感じつつ、渋々3匹のファービイを執事に用意させた。

「無料でやるわ。好きに選びなさい」

シスターが語る。

右の白いファービイはシャロン。

臆病で繊細で根性はないが、追い詰められたときの破壊力は凄まじく、半狂乱になると言う。

中央の目付きの悪い、黒と緑のブチはゲッペルス。

見るからに闘争心が激しいが、強いものにはひたすら弱く、飛び掛かろうともしない。

左の赤く華奢なフアービィはポソ。

脚力胸筋ともになく、主に心理的な嫌がらせで相手に立ち向かう。勝負には負けるが後に相手を心労で自害まで追い込むという。

「さあ。早く選んで」

「困ったな……フアービィなんていらぬのに」

「貴方ね、親父に恥ずかしく思わないの？」

「いや。どっちかと言えば、俺も無理矢理親父に言い詰められた形で、寧ろ被害者だと思ってるんで……」

シスターは呆れた。

こんな奴は放っておこう。

そう思いその場を後にする。

「あっ！こら！」

ゲッペルスがシャロンと性行為に及ぼうとしていた。

シスターは慌ててフアービィ達を連れて行く。

残された少年は呆けたままだった。

野外。

少年は疲れたのは体育座りで空を眺めている。

さらに暇なのか蟻の群れをプチプチ潰していた。

傍にはマスタードが寄り添っていた。

「お前は俺に同情してくれるのかい？」

マスタードは首を横に振り、蟻を口先でちよいちよい摘み始める。
少年は虚しい気分になり、石をぽいぽい投げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5450p/>

鳥来々～熱烈漢浪漫記～

2010年12月17日06時27分発行